



お話
いただいた方

子どもの居場所&子ども食堂「ガラクタハウス」代表 園崎 寿子さん

NPO法人とよなかESDネットワーク

とよなか子どもの居場所ネットワーク チーフコーディネーター 上村 有里さん

インタビュー・ライター：大阪大学大学院経済学研究科 大阪府こども食堂ネットワーク 西山
撮影：認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ 圓藤

みんなが自然に集まるリビングのような居場所「ガラクタハウス」。
どのように生まれ、運営されているのか。ここを立ち上げた園崎さんと活動を
支える上村さんを囲んで、その取り組みについて伺いました。

こども食堂をはじめたきっかけ

「ガラクタハウス」を始めたきっかけを教えてくださいませんか？

園崎さん 私はフィリピンに留学していたこともあり、子どもの支援や移住女性の支援のNGOなどにはずっと関わっていて、いつか何かしたいなと思ってたんですよ。移住女性の支援などがきっかけで、とよなか国際交流センターに出入りしていたのですが、当時センターでは豊中市の学習支援事業があって、そこで子どもたちのおやつ作りを手伝うようになりました。でも、その活動が終わってしまって、「もったいないな」って思っていました。コロナで自分は外国には行けなくなったり、学習支援の子どもたちもばらばらになってしまったのが、2020年の春頃のことです。だったら、「自分の家の近くでできること」をしようと思うようになりました。この思いを国際交流センターのボランティア仲間に伝えたところ、数人が賛同してくれたので、思い切って場所を確保して、食事つき学習支援の活動をスタートしました。

「ガラクタハウス」のここがポイント！というところを教えてくださいませんか？

園崎さん 1階と2階に分けて、1階でお勉強をしています。2階は不登校や勉強が苦手な、プリントを使ったような学習になじめない子どもたちが、ゲームや工作、おしゃべりをしています。夜6時半からご飯なので、その時間になったら勉強してる子は2階に上がってみんなでご飯を食べます。登録制ではないですが、この子は来ることになってるよねって子は15人くらいいて、交代で休むので、1回に10人前後、幅広い年齢層の子が来てくれています。子どもたちは学校も別なんですけど、とても仲がいいんですよ。仲がいいもんやから勉強よりおしゃべりしちゃうんです。

私たちのほうが「掛け算とか、お金の計算とか、時計読んだりできたほうがいいんちゃうの」と勝手に思ってやらせようとする、次の週は来なくなっちゃったり。不登校の子に、無理にプリントやらせようとして、来なくなってしまうよりは、ここに来て友達とか、大人とか、ほかの子どもと触れる機会があるほうがいいなと思い始めて、無理にプリント学習みたいなことはさせないことにしました。

上村さん 私たちが見ている感じるの、子どもたちはある程度お腹が満たされて、遊びもできて、周りのみんなにわがままを聞いてもらえると、次は自然と勉強したい気持ちになるんだなということです。でも、まずは元気に生きてくれたら、それでいいですよ。

園崎さん そうですね。この間、子どもの1人がお裁縫をやり始めたんです。その子が「ミシンがあったらいいな」というから、すぐにミシン屋さんに走りました。お店の人に「こども食堂やって、子どもがミシン欲しいって言うんですけど、何かお手頃な中古ないですか？」って聞いたら、「こども食堂って聞いたことあるけど、どうやって運営してるんやろう、応援したいなと思ってたんです」と言っていたので、「これあげるわ」と特別に1台いただきました。

ボランティアSさん その子は、家に小さい子もいるから、針とか使わないように言われていたようです。だから、ここでできるならやりたいと思っていたみたいで、その思いを実現することができました。



いろいろな国の料理が出てきますよね？

この間はトルコ料理でした。今日はフィリピン春巻きです。



つながりがつながりをつくる

上村さんとの出会いやこれまでの関わりを教えてくださいませんか？

上村さん 元々、私たちのNPOは「いこっと」（子どもの居場所ネットワーク事業）を受託する前に、市民公益活動支援センターの前身になる市民活動情報サロンっていうところを運営していたんです。そのメンバーが園崎さんの知り合いで、市民活動の相談に乗っているうちに、相談の内容が子どもの居場所に関することだったので、「いこっと」の方に移行していった感じです。

園崎さん 国際交流センターを中心にいろんな人とつながりがあったので、相談に行けばつながっていくことができると思っていました。

上村さん 豊中市は他市に先行して子ども食堂をしていた団体さんいくつかありました。でも、先行してやっていた数団体、それこそもう、子ども食堂なんて何？みたいな時代から活動されていた方は、やっぱり孤立しがちだったんですよ。孤立しないで、もっとつながっていくためにはどうしたらいいんだろうね、って言っていた時に、社会福祉協議会さんの子ども食堂ネットワークができあがり、後発で「いこっと」も生まれました。園崎さんは、物件何かないかなとか、どういうふうにやったらいいかなって言いながら、もう「居場所やるんだ」って一直線で、豊中市内でネットワークが活発になる最初の波に乗っていかれたように思います。

ボランティアメンバーさんとも「どういふかたちで団体を運営していくか」っていうところをていねいに話し合いされて、私も何回か呼んでいただいて参加させてもらっていました。居場所によっては、近隣とうまく付き合うことができず、撤退しなきゃいけないとか、場所を変えなきゃいけないっていうところもありますが、園崎さんは本当に上手につながりを広げておられます。





地域にひらかれた居場所をめざして

これから「ガラクタハウス」は、どんなふうになっていくのでしょうか？

園崎さん 今来てくれる子どもたちは、すごく仲良くなっています。でも、もう少し地域にひらかれた、地域の人に知ってもらえるような、広く来てもらえるような場にしたいなと思っています。それで月1回、「ちょっと重なってるけど、少しずれてるくらいのメンバー」で日曜日にも活動を始めました。

日曜日は、今はまだ内容によって予約制にしています。例えば、餅つきとか、バザーや駄菓子屋さんとかは誰でもOKにして、居場所の中でやるお菓子作りやパン作りは予約制に。でも、予約制にすると（行かなきゃいけないと）プレッシャーを感じて来れない子がいることを知りました。親御さんもキャンセルになったら申し訳ないと、参加するのを遠慮されてしまったり。

予約制にしているのは自分たちの都合なので、日曜日はできるだけ、「いつでも誰でも気軽に来れるような居場所」にしていけたらなと思っています。ニーズに合わせて、活動内容を修正しつつ、大人も子どももこの辺のお店の人も、いろんな人をつなげていきたいと思っています。

